足りない職人

職人の受け入れについては、現地責任者の方は各業者へ連絡を、宿泊については私が役場・旅館にあたることとして段取り、手配しました。しかし、結果的には利用は二業者のみに留まりました。新建東京支部の増田氏から全建総連の田口氏を紹介され連絡をとりましたが、受け入れ側の要求も思ったほどにはなく、空振り的になっています。しかし、決して町内業者だけで間に合っているのではなく、町外からの業者も結構入っています。また、町内の職人も元請けが町外の場合はそちらへ取られてしまいます。

28日には新建新潟支部の岩野氏から連絡が入り、国会答弁で豪雪地域での地盤ひび割れに対する支援が引き出せそうだということで、中越災害救援センターの一員として再度県の危機管理室へ出向きました。

3　小国入りその3（12月6日～12月11日）

応急修繕の進行状況

12月6日夜の会議では、応急修繕支援の期限に対する業者の対応についてと、役場から出されたシート屋根のリストと業者の相談者リストとの突き合わせで修繕漏れがないよう対策を講じることが議題でした。漏れに対してはメンバーで分担して聞き取りをすることにしたのですが、応急修繕のレベルについて業者間で大きな見解の相違があることがわかりました。「応急処置」なのか「修繕」なのか、その考えの違いです。応急修繕支援の期限については、県としては「年内に申し込みの手続きをするなら、工事完了は本格的な雪が来るまでによい」と変わってきています。歯切れの悪い言い回しをせざるを得ないでいます。行政であれ業者であれ、まずは被災者が支援制度を受けられるようにすることを第一に考えるべきであると、痛切に思います。

4　小国入りその4（12月27日～12月28日）

最後の被災者も仮設住宅へ入り、年を越すことになりました。年明けには気分を一新し、前向きな気持ちになれるよう、私たち技術者の役割も大きなものと考えます。被災者は心配事を一杯抱えています。家の再建、田畑の修復、兼業農家が多いので仕事のこと等々。村おこしが大いに関係あります。

5　年明け以降

被災地仮設住宅改善ネットワーク（＊2）の設立

現地の知り合いから、建物の被害調査を設計監理を担当した地元の事務所へ依頼したが、忙しくて対応してくれないということで、直接本人からこちらへ連絡が入ってきました。相談室が機能していないようです。

一方、年末に避難所からやっと仮設住宅へ移ってきて、今後のことをじっくり考えてと思っていたら、壁面の結露・天井からの異常な水滴の漏れが発生し、居住者が頭を悩ませているとのことでした。

今回与えられた仮設住宅は、裸の鉄骨柱と鋼板で断熱材を巻いた壁パネルの壁体でつくられています。雪国において、とても部屋が暖まるような構造ではありません。逆にラジエーターの如く熱を放出する構造です。結露を防ぐため除湿機を利用することが奨励されました。適度な湿度は体感温度、喉の健康上必要です。「天井裏の断熱材を2倍にした」ことのみが雪国対策のものでした。

実際に見てみると、屋根の折板裏には隙間のないほどビッシリと水滴が付いています。天井上の断熱材もビショビショで養生シート内に水が溜まっています。さらに私たちの調査で、軒や折板重ね部からの漏水も指摘され、プレハブ協会と県もそれを認めざるを得ませんでした。雪融け後に一斉調査をすること、屋根を剥がして断熱材の取替えとそれらの修復処置を施すことになりました。福岡へも情報を送りました。

中越地域にふさわしい復興家づくり・村づくりの提案

3月22日、中越復興市民会議主催の第1回会合が長岡市で開かれました（＊3）。NPO関係を含めたボランティアが主な参加者でした。今後の組織化に有効と思います。技術者の参加が少なく抽象的な感じでしたがそれも大切と思います。

4月10日は小千谷で市主催の2回目の復興計画策定市民ワークショッ